

「香散見草」記念号によせて

学長 野田 起一郎



松原中央図書館長名で「香散見草」25号を創刊10年目の記念号として発刊するので、原稿をお願いするという1枚の依頼文書が届いた。さて、「香散見草」とは何だろう。新米の学長としては勉強すべきことが多い。不勉強を反省する。

早速秘書課に頼んで、「香散見草」創刊号を見せて貰う。本学中央図書館の館報であって、1985年創刊、年二回発行の定期刊行物であることをはじめて知った。そしてまた、本誌の題名である「かざみぐさ」は本学の校章である梅の花を意味するものであること、「かざみぐさ」という梅の花の異名は蔵玉和歌集に由来するものであることも知ることができた。

広辞苑を引くと、かざみぐさ（風見草）梅の異称とあるから、香散見草はあて字なのかなと思ったりもするが、その点は私には定かではない。梅は厳寒に耐え、早春に楚楚とした可憐な花をつけ、馥郁とした香りを放ち、やがて実を結ぶという意味で本学の学風を象徴した校章であるので、本学中央図書館の館報の名称として大変相応しいと思う。香散見

草という字の並びも透明感あっていいし、これは何かなと好奇心をくすぐるところも意外感があって良い。

大学の中央図書館は情報化と国際化を軸とした教育研究の中核的拠点でなければならない。大学の水準はその大学の図書館を見ればわかるといわれる。本学中央図書館はその収蔵する図書・資料の質・量ともに近年とみに充実してきている。文学部部のEキャンパスへの移転にともない図書館のスペースも一段と拡大され、ハード面についても、飛躍的に充実されよう。

図書館が大学の心臓の役割を果たすことは、今や大学人の共通の認識である。この大学の心臓機能の健全な維持のためには、ハード面の拡充とともにソフトの充実も欠かすことができない。これを運営する館員のレベルが高くなければ、学問の場としての図書館の機能は十分に発揮できない。サービス機能を持たない図書館はあり得ないのである。

この香散見草が、このような意味での図書館のサービス機能を補完する一助になることを期待したい。

